

# A Storm in the Tube

## ロンドンチューブ環状線

ロンドンの地下鉄はチューブと呼ばれる。その名のとおり、丸くくりぬかれたトンネルの中を轟音をあげて電車が走る。ニューヨークと違って治安が良いのもロンドンの自慢だ。設計は古いから車体はかなり揺れるけれど、このネットワークを利用すれば、市内のどこにでも行ける。



小林 昭 写真  
Photographed by Akira Kobayashi  
古賀ゆずる コーディネート  
Coordinated by Yuzuru Koga

何かを勉強しようと思えば、ロンドンという街は格好の素材に満ちている。美術建築、ファッション、工芸、といった文化的な分野では、なんといつても蓄積がものをいふ。美術館、博物館を丹念に歩きまわらただけで、何日間もかかるし、その成果も期待できる。しかし、新しいものを創りだそうとする、これまた違う力が必要となってくる。

簡単にいえば、歴史から創造へということになる。シテイを歩くと、石や煉瓦造りの旧建築にはさまれてガラスとアルミの新建築がポツポツと芽を出している。チャールズ皇太子が本まで書いて悪目を並べた、現代風の街造りだ。しかし、これだつて、東京の無秩序ぶりに比べたら、整然と調和しているように見える。ここは昔からある種のエネルギー変換装置が働いていて、無秩序とか乱暴といった力を、きれいに整理整頓してしまうのかもしれない。

造形作家アン・キャリントンの  
ガラクタエネルギー回収法

地下鉄サークル線のバービカン駅の近くにアン・キャリントンのスタジオがあった。というより、それらしい古い二階建ての建物を捜し出でて、ギシギシときしむ階段を上つて乱雑にものが散らばる部屋に通され、初めてミミが倉庫じやなく、作品のあるスタジオで、すすけたガラス窓の向こうにバービカン駅があった、というのが正しい。

そしてアン・キャリントンに会つた。彼女の名前は、東京でも知られている。東急文化村のオーフニング・イベントに参加した他、2回の来日がある。ミニで、どんな作品を創つているのか? さつそく材料のガラクタと間違えていた作品について聞いてみる。

「えーと、この大きいワだけど」



ホリがたけの床に身長2メートル以上あるワが横たわっていた。顔を近づけてよく見ると、脚から背中から革靴をいっしょくまとめて造られている。

「こんな、これ全部、靴じゃない？」

「そう、揃えるのが大変だったのよ。みんなワ革でし。古いゴミから選んできたの。でも、色とか素材を選んでいくと、なかなか使えるのがなくて、材料集めにたいぶ時間がかかったわ」

ホントにブーツもあればスリッパもある。ローファー、編み上げ、よくもこれだけ。彼女、大作主義なのだ。ひとつの作品を造るのに数か月はさら、一年以上かかってしまうこともあるらしい。このワ、彼女によつて元の姿ならに戻ったわけだ。とにかく面白い、ワが寝ている隣の椅子には、金属製のエビがいた。気がつく、その仲間のサカナやカエルも。こわくわくと手にとると見ると、これまた胴体が空型、ハサミはウォーク、脚はスプーン、頭は靴型といった金物ばかりで造られている。

「こういう材料つて、どこから集めるの？」

「まあ、全部ゴミといえばゴミだけど。スクラップ置場とかものによつて色々なところがあるよ。そのエビなんて材料を集めていたら面白くなってきて、サカナとか仲間を色々造って見たの」

「ゴは？ アレは？」 とたずねていつても、全部材料はゴミ、といつては失礼だから産業廃棄物や家庭からの廃品。名作はジーンズの一部分の布はしを州ごとに

あてはめた巨大アメリカ合衆国地図。日本の主婦の趣味とは発想のスケールが違う。日本の若いアーティストでもゴミから作品を造る、といった作風はあるけれど、ちやうどハーイが違ふ。

話が変わるけれど、ロンドンの街や道路は、いつ見てもキレイなものだ。ゴミなんか落ちていない。でも、ゴミ収集の方法は、ナゾミ、可燃物、不燃物なんていうふうに分別収集しているわけではない。全部まとめてキレイにホイス。市民道徳は尊敬するくらい高いけれど、エゴジシの意識は感じられない。良いところなのか、どうなのか。

ともかく、アンはまた別のゴミを集めて次の大作にとりかかっていた。ほぼ実物大の馬の材料は、なんとヤシの実だ。丸い鼻、長い馬面、ふさふさのタテガミ、太く力強い首、全部ヤシの殻で造る。この立体造形の芯には針金と粘土が入られている。彼女はロイヤル・カレッジ・オブ・アート出身だ。ロイヤル・アルバート・ホテルの近くにあるこの芸術大学は権威がある。もちろん、それだけでなくアーティストやデザイナーの逸材を毎年送り出している名門校だ。そこで造形を専攻した彼女、基礎はしっかりしている。ヤシ殻の馬は今にも動きださそうにダイナミックで、生きている。

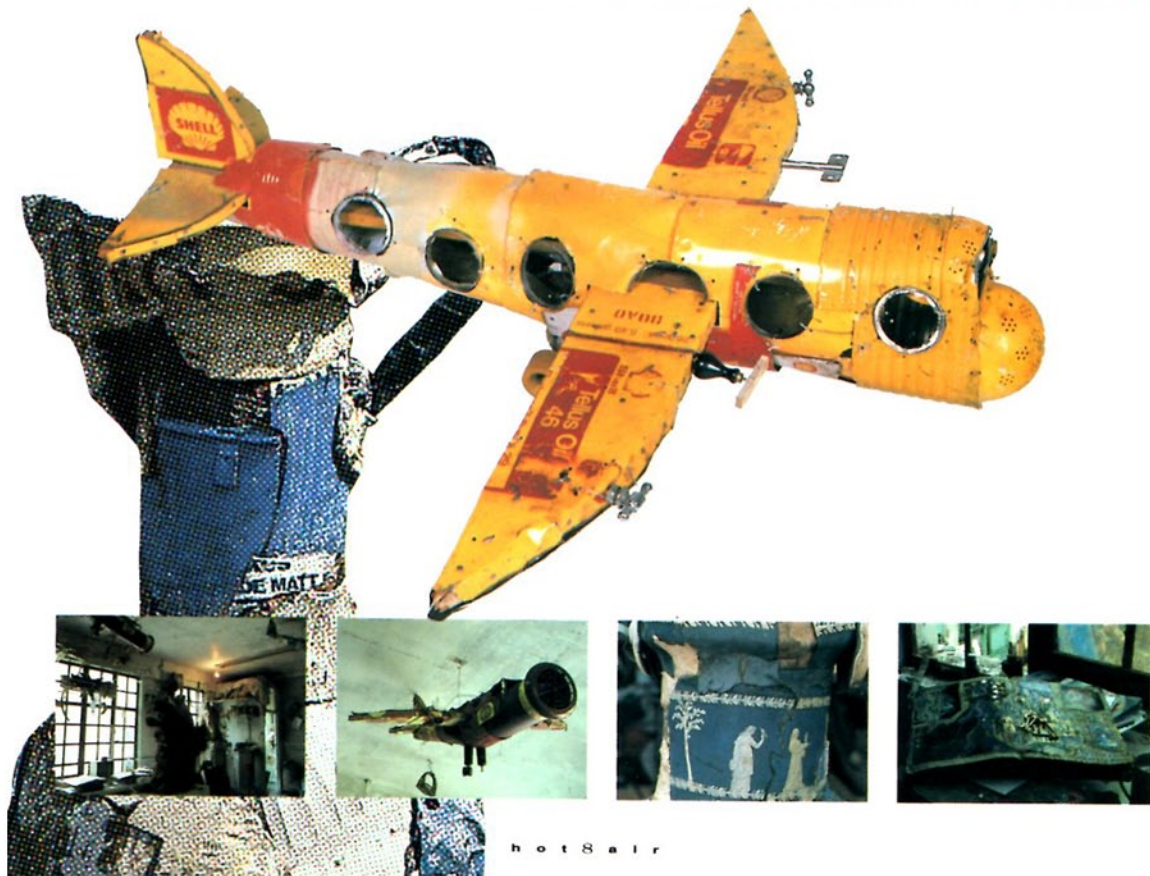
「材料のヤシ殻は友だちがヤシを扱う工場に勤めているから、そこから送ってもらってるの。一度にそんなに量が出ないから、これも少しずつ仕上げています。」

と彼女。大作家として立派なゴゴのもち方なのだ。それにしては、このスタジオは汚い。彼女が使う前は、この建物はインテリア内装業者のオフィスだったという。そのため、裏庭が広い。ちやうどハーイビカン駅と地下鉄線路を見下ろせるその裏庭に出てみると、錆びて朽ちたクルマ、誰かの巨大な作品なんかがいっぱい並んでいる。ガラタのテーマパークのようだ。

アンがロンドンの若いアーティストの典型というわけじゃない。むしろ、ユークなほうなんだろう。でも、圧倒的にパワフルで面白い。また日本へどうぞ。

この前日本に来た時、何か面白い材料は

## A Storm in the Tube







Ann Carrington

アン・キャリントン Ann Carringtonは1962年ウインチェスター生まれ、87年にロイヤル・カレッジ・オブ・アートを卒業、本格的な作家活動に入る。スウォッチ展最優秀賞受賞はか大活躍。ギャラリーには委託せず、個人営業のアーティストである。54 Charterhouse St. Corner Hayne & Linsey St. LONDON ☎ 071-796-4019にある彼女のスタジオを訪ねれば作品は手に入る。A0サイズのカラーコピーによる作品は95ポンドだ



この人は、「ロイソクの科学」で知られるマイケル・ファラデーと同じ年に生まれた。という事実を知ったのも、科学博物館でこの

地下鉄サークル線のサウスケンジントン駅で下りて地下道を延々と歩く。出口は自然史博物館。その隣には地質学博物館。通りの向かいにはビクトリア&アルバート博物館がある。そして、イドパークに向かつてゆるやかな坂の続く歩道歩く。と、左側の建物が科学博物館だ。ここに、スチームコンピュータが展示されている。

地下鉄サークル線のサウスケンジントン駅で下りて地下道を延々と歩く。出口は自然史博物館。その隣には地質学博物館。通りの向かいにはビクトリア&アルバート博物館がある。そして、イドパークに向かつてゆるやかな坂の続く歩道歩く。と、左側の建物が科学博物館だ。ここに、スチームコンピュータが展示されている。

地下鉄サークル線のサウスケンジントン駅で下りて地下道を延々と歩く。出口は自然史博物館。その隣には地質学博物館。通りの向かいにはビクトリア&アルバート博物館がある。そして、イドパークに向かつてゆるやかな坂の続く歩道歩く。と、左側の建物が科学博物館だ。ここに、スチームコンピュータが展示されている。

この人は、「ロイソクの科学」で知られるマイケル・ファラデーと同じ年に生まれた。という事実を知ったのも、科学博物館でこの

地下鉄サークル線のサウスケンジントン駅で下りて地下道を延々と歩く。出口は自然史博物館。その隣には地質学博物館。通りの向かいにはビクトリア&アルバート博物館がある。そして、イドパークに向かつてゆるやかな坂の続く歩道歩く。と、左側の建物が科学博物館だ。ここに、スチームコンピュータが展示されている。

地下鉄サークル線のサウスケンジントン駅で下りて地下道を延々と歩く。出口は自然史博物館。その隣には地質学博物館。通りの向かいにはビクトリア&アルバート博物館がある。そして、イドパークに向かつてゆるやかな坂の続く歩道歩く。と、左側の建物が科学博物館だ。ここに、スチームコンピュータが展示されている。

地下鉄サークル線のサウスケンジントン駅で下りて地下道を延々と歩く。出口は自然史博物館。その隣には地質学博物館。通りの向かいにはビクトリア&アルバート博物館がある。そして、イドパークに向かつてゆるやかな坂の続く歩道歩く。と、左側の建物が科学博物館だ。ここに、スチームコンピュータが展示されている。